

特集：ケアの倫理と人文学——解像度を上げるために

「ケアの倫理」は、これまでの社会が自立した個人を前提として構成されてきたことを根本的に問い直すものである。個人や家族、社会、政治など多層的な水準においてパラダイム・チェンジを生み出すものとして、近年広く関心が高まっており、応用倫理学などによる理論的検証から、社会学や政治学などによる社会構造の分析、また文学や映像学などによる表象分析まで、多様な研究領域で、問題意識が共有されつつ検討が進められている。昨年度の超域文化社会センター国際シンポジウムでは、「ケアの倫理と人文学」と題し、これらの多様な研究領域における先端的知見を結び合わせることを目指した（2023年1月28-29日、於名古屋大学）。第一セッションでは、「ケアの倫理」が現代社会に与える思想的なインパクトについて、第二セッションでは、ケアが実践される現場において具体的に生成される関係性について、第三セッションでは、ケアという問題系に交差する多様な力学について、横断的な議論を行った（詳細は『JunCture』14掲載のレビューおよび2023年度事業報告を参照されたい）。「ケアの倫理」は、これから持続可能な社会を生み出していくための根源的な方向性を示すもので、キャロル・ギリガンのいう「もうひとつの声」によって構成されたオルタナティブな理念である。誰もが必ず必要とする依存関係を社会の設計に組み込み、他者への配慮を一つの価値とみなすものでもある。シンポジウムでは、その理念としての意義を確認するとともに、周縁化されてきたケア領域を可視化することの必要性も議論された。またそのうえで、現状のケアの現場やその多様性に目を向ければ、様々な困難や調整の必要な複雑な問題が浮上することも指摘された。ケアの可視化は、現状のケアの単なる肯定にとどまるものではない。「ケアの倫理」を実践していくためにこそ、より詳細にケアの現場の多様性とその困難を注視しつつ可能性を探る考察が必要となるだろう。

本特集は、シンポジウムの登壇者のうち五名の論考によるもので、「解像度を上げるために」という副題を付した。シンポジウムでの報告にもとづいたものと（安井論文、渡邊論文、飯田論文）、さらに議論を展開させたもの（小西論文、ロング論文）によって構成されている。小西論文は、キャロル・ギリガンが、『もうひとつの声で』（1982）以後、批判に応答しつつ展開してきた〈人間の倫理としてのケアの倫理〉という思想を、共感が規範化することへの危惧とともに検証し、「人間」の基準から除外される「異なる声」にも耳を傾けるものとして論ずる。安井論文は、意志という概念が、非対称性や権力関係が介在せざるを得ない関係性においては不当な抑圧につながることを指摘し、ケアされる者の意志決定を、能動／受動ではなく、能動／中動の枠組みで捉え返すことを提示する。渡邊論文は、障害者自立生活運動の実践の現場から、ケア論との葛藤の歴史を見据えつつ、現在に至るケア論の変遷を辿り、他者への配慮を根底に置いて「自立」とは異なるあり方をめぐる議論の中に、自立生活運動と「ケアの倫理」との接点を探る。飯田論文は、ヤングケアラーという概念の流通に応じて新たに登場した小説群をとりあげ、ヤングケアラーの可視化の様相を考察し、困難なケアの日々であっても離脱が望まれることはなく、〈余白〉をつくることで関係を維持するナラティブが構成されていることを指摘する。ロング論文は、ニューロダイバーシティ論の近年の知見を用いて、大江健三郎の『水死』における父親と知的障害のある息子の関係を分析し、父親の政治的二極性を特徴とする思考の枠組みから外れた、息子の独創的な音楽的感性と身体の共鳴からなるセルフケアの様相を読み解く。以上、五つの論文はケアをめぐる浮かび上がる問題に目を向けつつ、「ケアの倫理」を実践する方向に向かってその可能性を探るものである。「ケアの倫理」を考える際の解像度が上がることを願っている。（飯田祐子）